

## 鼻金秀でつくれる木米 社員との対談

### 第56回

### 環境リレーションズ研究所×良品計画

## 記念樹とともに、森と地域の元気を育てる



2016年9月26日

社会貢献活動を行う団体の活動を、良品計画の社員との対談を通してお知らせします。第56回は、「人生の記念日に樹を植えよう」をスローガンに掲げる「Present Tree」プロジェクトを通じて、森林再生と地域振興に尽力している、環境リレーションズ研究所さんにお話をお聞きしました。

### 森との関わりが希薄になった日本、そして都市と地域

日本は国土の約7割が森林で占められている「森の国」です。しかし、自然災害、開拓後の放置、そして経済的・人材的な要因による手入れ不足や植栽放棄など様々な理由から、多くの森林において荒廃が進行しています。人々が自然との共生のもと、積極的に森を手入れし利用してきたからこそ、日本の森の生物多様性は守られてきたといわれます。森林と地域を元気にするプロジェクトを運営するNPOのお話から、環境のために「何とかしたい」「何かしたい」という気持ちの届け方を、一緒に考えてみましょう。

## プロフィール

環境リレーションズ研究所

援を実現しています。

環境リレーションズ研究所



#### 平沢 真実子

環境リレーションズ研究所  
事務局長

大学卒業後、銀行勤務を経てイタリア留学。帰国後欧州系ファッションブランド企業に入社、以降同業界数社で約20年間マーチャンダイジング部門に携わる。自身のライフスタイルを見直すことがきっかけで環境問題に興味をもち、2010年環境リレーションズ研究所に参画、2013年から現職。現在は、前職で培ったマーケティング手法を活かし、一般市民や企業の共感を呼び、より多くの人が無理なく環境活動に参加できるプログラムの企画・提案・運営に取り組んでいる。



#### 小林 厚

良品計画  
生活雑貨部 ファニチャー担当 MD

2002年入社。無印良品有楽町に配属後、都内の店舗にてスタッフとして勤務。2006年より店長として、関東の店舗を4店舗経験後、2012年にブロック店長となり、約9年間店長を経験。2016年2月より現職。現在、ファニチャー担当のMD（マーチャンダイザー）として、新商品の開発や、営業展開の計画などを行う。店舗経験を積んだ強みを生かして、お客様に支持される商品の開発に取り組んでいる。



#### 林 高平

良品計画  
販売部/有楽町 インテリア  
アドバイザー・マネージャー  
法人担当

2011年入社。オフィス・モデルルーム等の内装設計を行う。無印良品初のオフィス家具「日本の木でできた家具」の開発からプロモーションに携わる。商品やサービスづくりにおいて、現場の生の声を聞いた上で、利用者へ「商品のわけ」を伝えていくことの大切さを再認識する。このプロジェクトがきっかけで、国産材活用推進をライフワークとして行うと決心。家族で近所の映画館に行った後、温泉に行く事が休日の楽しみ。

## 人の手が入らないことで広がる、森林の荒廃

**小林：**森林の荒廃という言葉を目にしたことはありますが、具体的な状況について詳しくは知りません。日本の森林には今、どのようなことが起きているのでしょうか。

**平沢さん：**森林には自然の力で生まれ育った「天然林」と、木材生産などの目的で植栽を行い人の手で保育管理をする「人工林」があります。現在、日本の森が荒廃していると言われてるのは、この人工林に関する管理放棄の問題を指すことが多いと思います。人工林は、植栽した後間伐などの手入れをし、伐採後はその跡地に再植栽して育成し循環利用



人工林の植栽放棄地

**平沢さん**：森林が置かれている環境や地域の状況によっても荒廃の原因は異なります。天然林のうち、約6割がいわゆる「里山林」といわれています。これらは、戦後日本人の生活様式が急激に変化したことで利用されなくなり、手入れがされず荒廃しているところが多いのが現状です。そのため、里山由来の植物や生き物の多くが絶滅の危機にさらされ大きな問題となっています。いずれにしても、一度人が手を入れた森林は、その後もきちんと管理しないと荒れてしまうということです。

**小林**：荒廃が進行してしまう背景としては、林業者や自治体など、管理を行う方々の手が回りきっていないということがあるのでしょうか。

**平沢さん**：そうですね。人工林の場合は、伐採後にまた植栽を行うという循環利用のサイクルが回ってれば、健全な状態が続きます。しかし、経営的な問題などから、そういった保育管理ができない植栽放棄地が、各地で増えてきています。

**林**：そういった森林は、放っておけばすぐ元の自然に還っていくといった類のものではないということですよね・・・。

**平沢さん**：はい。日本は温暖な気候ですので、時を経れば自然の力で元々の森の姿に遷移していく可能性は高いのです。しかし、それには気が遠くなるほど長い時間がかかってしまいます。また、その土地の置かれている地理的気候的条件によっては、森として再生することが難しい場合もあります。人が樹を植えて保育管理を行うことで、森の再生速度を少し速め、生物多様性が豊かな自然環境を回復することができます。

## 一人ひとりが樹の里親になる「Present Tree」

**林**：ご活動の中心となっている「Present Tree」について教えてください。

**平沢さん**：「Present Tree」は「人生の記念日に樹を植えよう」というスローガンを掲げているプロジェクトです。出産や結婚などの人生の節目に、相手にモノを贈るのではなく「記念樹を植えてその里親になっていただく」というプレゼントを贈る、という取り組みです。環境のために「何かしてみたい」という気持ちを抱えた方々が、気軽に森林再生と地域振興に貢献するような企画の枠組みをつくりたいという想いから動き始めました。

**小林**：プレゼントを贈る感覚で気軽に環境活動に参加できる。素敵ですね。「Present Tree」を贈られた人が、自分が里親になった樹を直接見に行くことはできるのでしょうか。

**平沢さん**：はい、植えた苗木にシリアルナンバーを付けて管理しているので、里親になっていただいた樹を1本1本識別することができます。私有林でプロジェクトが行われていることもありますし、一般の方にはアクセスしづらい植栽地もありますので、そういった場合は事前に私どもに連絡をしていただく必要はありますが、現地苗木の成長を直接ご確認いただけます。

**林**：私も小学校のころにもらった記念樹を実家の敷地に植えています。実家に帰るとその樹が今も成長を続けていて、見るたびに懐かしいような、嬉しい気持ちになります。樹が育っている姿を現地で実際に見たら、絶対嬉しいですね。

**平沢さん**：成長を見守るというのは、記念樹の醍醐味ですよ。 「Present Tree」ではプロジェクトを開始するにあたって、その土地の持ち主と地元行政、さらに地元の森林整備機関、そして私どもの4者で10年間の森林整備協定を締結しています。これにより、苗木を植えた後も下草刈りや獣害対策など10年間、現地のプロの施業者による保育管理を担保しています。



## 鼻金秀でつくれる木米

## 社員との対談

## 第56回

## 環境リレーションズ研究所×良品計画

## 記念樹とともに、森と地域の元気を育てる



## 共感が「自分ごと」につながっていく

**林：**私は普段、国産材を活用した家具の開発などを行っていますが、一般の方々に国産材を使うことの価値を伝えることの難しさも常日頃感じています。国産材を使うことが森林の保護につながり、巡り巡って私たちの生活につながっていくことを伝えて、「自分ごと」として捉えていただくことが、とても大切なことだと思います。

**平沢さん：**他人事だと感じているうちは、行動に移すのがなかなか難しいですね。私たちも「なぜこの土地に樹を植えるのか」「なぜこの樹種なのか」という、背景にあるストーリーを伝えることによって共感を生み、より具体的に問題を捉えていただけたと思っています。

**小林：**森づくりをする理由というのは、どういったものなのでしょうか。

**平沢さん：**地域によって様々ですが、基本的には地元植生の広葉樹数種を混植して、その土地の元々の自然の森に戻すことが目的です。たとえば山梨県では、マツクイムシ被害で荒廃したアカマツ人工林の枯損木を伐採して、その代わりに広葉樹を植えて里山に戻す活動を行っています。他に、岩手県の宮古市では、自然の力では森に遷移できない放牧地跡で、川の水源になる森づくりをしています。これは森が育む栄養のある水が川から海にそそぎ込み豊かな漁場を守るという観点から、宮古市の復興を支える一助ともなります。また、このようなストーリーを伝えるためのリーフレットも作成しています。



**小林：**「興味はあるけど、何をしたいかわからない」という方々が一步を踏み出すためには、きっかけが必要になります。こういう形でストーリーがわかりやすく伝わると、なんだか背中を押されますよね。

**平沢さん：**絵というものは直観的にイメージが伝わりますよね。背景にある少し堅苦しいストーリーに考えを至らせるのは難しくても、絵を見てかわいいと感じていただければ、それがきっかけで興味をもって下さると思うんです。身近に感じていただく機会をさまざまなかたちで提供することで、「環境のために何かしたい」という気持ちを抱えた方々の背中を押すことができるのではないかと考えています。

## 地域振興が、やがて森の潤いに

**小林：**植樹地でのイベントなども行っているんですね。各地域の方々との協働されるご活動を10年以上続けられてそういったハードルを感じられた体験はありましたか。

**平沢さん：**活動が動き出すまでは、いつも難しさを感じます。というのも、地域の方々からしたら、いきなり見ず知らずのよそ者がやってきて「あなたの土地に植林させてください」と言っているという状態なんですよね。まして、植えた樹を1本1本管理するというのは、一般的な森林施業者さんを行わない作業です。その状態から企画を動かすには、まず互いを深く理解し合う必要があります。これは正直、あまり簡単なことではありません。



**林：**私も木材調達の際に、同じことで苦労をしたことがあります。まず仲良くなっていく必要がありますよね。その土地で暮らす人のくらしは、現地の方と膝をつきあわせて話をすることで、やっと少しずつ理解できますし、相手の目線がわかるようになると、向こうも親しみを感じてくれるようになります。その土地に馴染む必要がある、というか。

**平沢さん：**おっしゃるとおり、最初のステップとして、私自身がその土地の方とちゃんと交流をし、話し合いを重ねていく必要があります。互いを知り交流を深めていき、そのうえで本気で10年間お付き合いしていく想いを共有できるか、ということと一緒に考えてから、やっと動き出すことができます。

**小林：**一度動き出すと、そこから先はスムーズに進むのでしょうか。

**平沢さん：**そうとも言い切れません。ただ、実際にイベントを開催して、たとえば都市部の方々との交流が始まると、地元を好きになってもらえることの嬉しさや、自分の暮らしている地域の良さにあらためて気づかされるという発見があります。色々なことを机上ではなく実体験として感じてもらえるんですね。そういう体験を経てビジョンを共有することで、来年も再来年も実施していこうという声がむしろ地域側から寄せられたり、現在の活動エリアの植栽が終わったら向こうの土地に植栽地を広げよう・・・など、積極的にご提案いただくことも多くなりました。

**林：**地域の方と協働を深めていくことが、森づくりの輪を広げていくことにつながっていくんですね。

**平沢さん：**はい。「Present Tree」は、都市と地域の方の交流を促進することで、森づくりを行っている地域を元気にしていくことも目的のひとつです。地域が賑わうことで、経済的にも活性化しますし、地域の人々の環境意識が深まることでまた森も潤うようになっていきます。ただ植えるだけではなく、地域の方々とともにそういった良い循環をつくっていける、息の長い活動にしていきたいです。

## 森から新たなストーリーが生まれ、地域へ還ってくる

るかもしれません。その方々が実際に体験したことをきっかけに、購入した製品の材料となる木がどこから来たのか、どうしてその木が使われたのか、ひいては日本の森林事情についてじっくり考えていただければ嬉しいですね。

**林：**まずは知ること、そして次の行動に結び付けていくこと。どんどん展開していくことで、新しいものが生まれていきますよね。平沢さんが今後の「Present Tree」を取り巻く展開として期待されていることとしては、どのようなことを考えていますか。

**平沢さん：**今は、私たちが旗振り役となって地域の協働者の方々とともに「Present Tree」の活動を行っているのが現状なのですが、逆に地元の方々がこの活動を拠点にして、率先して地域おこしに繋がる何か新しい取り組みを進めてくださることが、ひとつの理想ですね。その際にももちろん、私たちでお手伝いができるとう嬉しです。

**小林：**時間が経てば経つほど、植樹を行った森林が形になっていくわけですし、地域の方々の意識というのも大きく変わっていきますよね。さまざまなアクションが期待できそうです。

**平沢さん：**国内の活動が始まったのが2006年でしたので、実はもうすぐ国内で初めて、植樹を行ってから10年を迎える森が出てくるんです。木材にして売るということは前提としていませんが、たとえば大崎市では水木（ミズキ）の樹を植えていて、これはこけしの材料になります。そこで「Present Tree」の森から生まれたこけしがつくれたらいいな、と。まだまだ構想段階ですが、そういったことも考えています。

**林：**また新たなストーリーが生まれ、地域が盛り上がっていく。素敵な循環が続いていきますね。

**平沢さん：**はい。私たちはそもそも、環境問題を漠然とは知っているけども何をしたらいいかわからない方々に、堅苦しくなく気軽に取り組めるような企画を提供していくための団体です。「Present Tree」を基盤にして地域が盛り上がり、そしてまた森が潤っていくという好循環ができれば、それが多くの人が環境に対して一歩を踏み出したということでもあるんです。これからもこの好循環が続くよう、尽力していきたいと思います。

## 対談を終えて

**小林：**環境リレーションズ研究所さんは、目にはっきりと見えるご活動というよりも、人の心に小さなきっかけをつくるという、目に見えない分野を中心にしたご活動をされていると知りました。そういった分野において、何年、何十年先というところに焦点をあてて森づくりに取り組むということは、非常にパワーのいるお仕事だと思います。長年尽力を続け、多くの人の背中を押しているということが、とても素晴らしいことだと強く感じました。貴重なお話をありがとうございました。

**林：**ご活動の背景にあるストーリーや、協働される方々の巻き込み方法などが非常に完成度が高く、私たちがこれから試行錯誤してつくらなければいけない取り組みの、ひとつの完成形を見させていただいたような心境です。森の元気さというのは、地域の元気さと比例しているように感じています。物理的に樹を植えることと、その土地に活動を生み出していくことの2つをうまく連携しながらやっていけるような活動が、私たちも今後できればと思います。その際に、ただのモノづくりだけで終わらずに、その後ろにあるストーリーという「コト」をきちんと伝えていくことが大切だということに気付かされ、とても勉強になりました。ありがとうございました。



山形県産品はこうつ



環境リレーションズ研究所は、2016年8月24日から2017年2月23日の期間、

無印良品ネットストア「募金券」で募金を実施し、

76人の方から合計32,600円の寄付を集めることができました。

ご協力ありがとうございました。

[実施中の募金券はこちら](#)

ポスト

いいね! 0

前のページ

1

2

[最新情報](#)

[企業情報](#)

[IR情報](#)

[サステナビリティ](#)

[無印良品について](#)

[採用情報](#)

[ニュースリリース](#)

[プライバシーポリシー](#)

[外部送信ポリシー](#)

[お問い合わせ](#)

[出店について](#)

[JP](#) [EN](#)